
クイーンズゲイト スパイナルカオス ~ 多次元を旅する戦士の戦い ~

ジンオウガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クイーンズゲイト スパイナルカオス〜多次元を旅する戦士の戦い

【Nコード】

N0992Z

【作者名】

ジンオウガ

【あらすじ】

次元には色んな世界が存在する。そんな多次元を旅していた主人公『如月拓海』は次の世界に行こうとした時、突然の地震に巻き込まれ、目が覚めるとそこは砂漠地帯だった……

主人公設定

名前：如月拓海

年齢：18歳

好きな事：旅、料理、サバイバル、写真撮影、トレジャーハント、子供の笑顔、動物、自主トレなど。

嫌いな事：子供を泣かせる奴、女の子の涙、人を見下す奴など。

容姿：ガンダムSEEDDESTINYのシン・アスカ

設定

本作の主人公で、多次元を旅する男。神が誤って殺してしまい拓海を別世界に転生させようとしたが拓海はそれを拒み逆に色んな世界を旅したいとお願いし、多次元を旅していた。その際に、神から選別として仮面ライダーWのロストドライバーとジョーカーメモリとスカルメモリと多用の能力を貰っている。性格は明るく、前向きな男だが、とても強さ正義感の持ち主。恋愛に関しては少し鈍い。

能力：ファイナルファンタジー系の魔法や召喚術、鋼の錬金術師の全ての錬成術など。

第1話 『次の世界は砂漠地帯！？そして、いきなり戦闘！』

ここは時間の時を走る列車『デンライナー』のターミナル。そのデンライナーから一人の青年が降り立つ。この青年こそこの物語の主人公『如月拓海』である。

拓海

「ありがとうオーナー。とても楽しかったよ」

オーナー

「いえいえ、こちらこそあなたのおかげで色々と助かりましたよ。お礼と言ってはなんですが、この電王ベルトとパス、そしてこの無期限チケットを差し上げます」

そう言っつてオーナーは拓海にベルトとパス、そしてチケットを渡した。

拓海

「ありがとうございます。では、俺はこれで。アイツ等にはまたよろしくと言っつておいてください」

オーナー

「分かりました。では、また何時かどこかで……」

そうオーナーは言っつて、デンライナーに乗り込むとデンライナーは発車して行った。拓海は見送った後、ベルトとパスとチケットをポストンバックに入れ、バックを背負う。

拓海

「さてと！次はどんな世界に行こうかー」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！

拓海

「なッ！？」

拓海が言おうとした時、突然地震が起きた。

拓海

「ちょ！地震！？しかもデカい！」

そう言っていると拓海の足下に罅が割れ、穴が開き拓海はその中に落ちた。

拓海

「うわああああッ！！」

そして、地震が収まると、拓海のいた所は何もなかったかのような穴が塞がった。

拓海

「……………此処は……………？」

落ちてから数分、拓海が気が付くとそこは砂漠地帯だった。

拓海

「なんでこんな砂漠のど真ん中にいるんだ？確か、デンライナーからターミナルに降りた後、次の世界に行こうとした時に地震が起きて……ああ！思い出した！その後、俺は穴に落ちたんだ！」

拓海はあの後起きた出来事を思い出し、そして立ち上がり埃を払い、近くに落ちていたポストンバックを背負い直すと辺りを見渡す。

拓海

「それにしても……此処はどんな世界なんだろう？空に月が3つぐらい見えるって事は、“なのは”の世界かな？でも、こんな砂漠地帯だったかな？」

拓海は前に行ったことのある世界かと思っていたその時。

ヒュウウウウウウ……。。

拓海

「……何だろう……なんか嫌な予感が頭上から感じるような……」

拓海がそう思いながら上を見た瞬間。

ヒュウウウウウ……ゴチンツッ！

拓海

「~~~~~!?!?」

その振ってきた物体が脳天に直撃し、拓海は声にも出せない位に痛みはその場に座り込んだ。

???

「……………う、うーん…はっ!?!ここは…?あ、そっか。さっきの地震で転んだんだ。良かった、怪我はしてないや」

拓海

「こっちは怪我したがー!」

???

「うわあ!?!あ、あの、どうしたんですか?頭にたんこぶ作って…?」

拓海

「お前が上から振ってきたおかげで出来たんだよ……(怒)」

拓海は顔に怒りマークをつけながら落ちてきた同い年くらいの青年に言う。

???

「す、すみません!」

拓海

「まあいいけど。あ、自己紹介がまだだったな。俺は拓海、如月拓海。お前は?」

ジャン

「僕はジャンと言います。ところで、ここは何処でしょうか?僕、お嬢様を探していた途中で地震にあい、そして転んだ拍子に落ちたんです」

拓海

「それがさっぱり分らないんだ。俺もジャンと似たような感じだし……」

ジャン

「そうですか……一体何処なんでしょうね……」

拓海

「……?なんか聞こえないかジャン?」

拓海は突然立ち上がりジャンにそう言う。

ジャン

「え?何がー」

???

「……キヤアアア!」

拓海

「!?!?上か!」

拓海はそう言うて上を見ると、女の子が落ちてきていた。

???

「助けてえ……っ!」

ジャン

「桃が!大きな桃が落ちてくるぅっ!?!」

拓海

「何言ってるんだよお前!?!っていつか桃って何!?!」

???

「きゃあ〜っ！あ、危ないですの〜っ！どいてくださいですの〜！
……あーや、やっぱりどいちゃだめですのっ！」

拓海

「どつちだよ（ ; ）!？」

???

「受け止めてください〜！」

拓海

「分かった！おりゃあー！」

拓海はそう言って、ジャンプして落ちてきた女の子を受け止め着地する。

???

「あ…ありがとうございますですの／＼／＼（は、はっ〜……か、か
っこいいですの／＼／＼）」

拓海

「どう致しまして、俺は如月拓海、気楽に拓海って呼んでくれ。ん
で、こつちがさっき知り合ったジャン。君は？」

まるん

「あ！自己紹介が遅れました。私はまるん〓まかろんと申しますで
すの！ところで拓海さん、一つ聞いてもいいですか？」

まるんはそう言って拓海に聞いてきた。

拓海

「何？」

まるん

「えーとですね…ここ…どこですか？」

拓海

「え？知らないのか？」

まるん

「…はいですの。学園で料理をしていたらいきなりここに落ちてきて…ここ…どこなんですの？」

拓海

「ああ、悪い 実のところ俺達も分からないんだ。こっちもまるんと似たような感じなんだ」

拓海は頭を掻きながらまるんにそう言う。

まるん

「そ、そうなんですの……チツ。役に立ちませんの(ボソッ)」

ジャン

「え？何か言いました？」

まるん

「いいえ？何も言ってないんですの？気のせいじゃありませんの？」

拓海

「まあとにかく、まるんを学園へと帰る道と、ついでにジャンの言

うそのお嬢様とやらを探さないとね。まろんは学園って事は何か大事な用事がありそうだし」

まろん

「そうですね。私も早く帰らないともうすぐ試験ですの」

拓海

「という訳で、とりあえず三人で行動しよう。その方が安全だしな」

拓海はそう二人に言う。

まろん

「わかりましたの！ひとまず三人でパーティを組みますの！よろしくですの！拓海さん！ジャンさん！」

拓海

「ああ！よろしくまろん！」

ジャン

「はいっ！よ、よろしくお願いしま……」

まろん

（まあいざという時はこんな貧弱でも肉の壁にはなりますし……それ……）

チラッ

拓海

「ん……？どっした？」

まるん

「い、いいえ！なんでもありませんの〜！（うう…い、いざという時、拓海さんが守ってくれそうですし…／＼／＼）」

拓海は何故まるんの顔が赤いのか疑問に思いながら、していると突然バチツと何か弾けるような音が聞けてきた。

ジャン

「え！？」

まるん

「何？」

拓海

「これは……？」

拓海は警戒していると突然周りに何処のチンピラのような感じの男達と犬っぽいモンスター達が出てきた。

ジャン

「うひゃあっ！で、出たあっ！」

ごろつきA

「おお！？なんだあ！？変な光の中に落っこちたと思ったら目の前にいきなりうまそーな獲物がいやがったぜ！」

ジャン

「え、獲物！？僕たちのことですか！？」

ジャンは怯えながらチンピラAに言った。

ごろつきB

「決まってんじゃねえか！痛い目に遭う前に金目の物全部出し……」

バチッ……ズガガガガガガッ！！

ごろつき達&モンスター達

「ウギヤアアッ（キヤイイインッ）！？」

ジャン&まるん

「……え？」

拓海

「はい終了。なんか前の世界でも似たような事があったよな。やっぱり呪われてんのかな俺……」

拓海は神にもらった錬金術で爆発を起こしチンピラ&モンスター達を吹き飛ばした。

ジャン

「えっと……今は拓海さんがやったんですか？」

拓海

「まあな」

まるん

「凄いですの！もしかして拓海さん、魔法が使えますの！」

拓海

「まあ似たようなものだな」

ごろつきA

「て、てめえ！！不意打ちかよ！？おかげで俺以外全滅じゃねえか！？」

拓海

「良かったな」

拓海はどうでも良さそうに言う。

ごろつきA

「クソツ！舐めやがって！こうなったらコイツを使ってやる！」

そう言ってごろつきAは懐からUSBメモリのような物を取り出し、そのメモリのボタンを押す。

《マグマ！》

拓海

「ッ！？お前、それを何処で！？」

ごろつきA

「へっへっへ！ある奴から貰ったんだよ！うらあ！！」

そう言ってごろつきAは自分の腕にあるコネクターにメモリを差し込むと、男の体に変化し、マグマのような体をした怪物『マグマ・ドールパント』になった。

ジャン

「な、何ですかアレ！？」

まるん

「と、突然腕に変なもの差したかと思えばいきなり怪物になったですのー!?」

マグマ・ドーパント

『クハハハッ!この姿になった俺は今や無敵だ。オラアッ!』

そう言っつてマグマ・ドーパントは三人に向かって火の玉を放つてきた。

ドカァンッ!!

ジャン

「うわぁ!?!」

まるん

「キヤアッ!」

拓海

「クッ……!!」

三人はかるうじて避けたが、まるんは腕に軽い火傷をする。

拓海

「大丈夫かまるん!」

まるん

「へ、平気ですの……軽い火傷ですし」

マグマ・ドーパント

『ギャハハハッ！命が欲しければさっさと金目の物を渡すんだな！』

マグマ・ドーパントがそう言っていると拓海は立ち上がり、マグマ・ドーパントを見る。その顔は怒りに満ちていた。

拓海

「……ジャン、まるんを頼む。アイツは俺に任せろ」

ジャン

「で、でも！いくら魔法みたいな力が拓海さんでも危険ですよ！！」

拓海

「大丈夫。アレの対処法は、知り尽くしているから……」

そう言っつて拓海は懐からロストドライバーを取り出し、それを腰に巻き付けた後、「と書かれたメモリを取り出し、ボタンを押す。

《ジョーカー！》

そして、それをロストドライバーに差し込み、そして構える。

拓海

「変身！」

『ジョーカー！』

すると、拓海の体が変わりそこにはジョーカーメモリで変身した仮面の戦士『仮面ライダージョーカー』へと変わった。

ジャン

「ええ!？」

まるん

「た、拓海さん!？」

マグマ・ドーパント

『て、てめえ!？何者だ!？』

拓海

「俺はジョーカー。仮面ライダージョーカー……さあ、お前の罪を数える!」

第2話 『メモリブレイクと門を開く者』

ジョーカーに変身した拓海はそのままマグマ・ドーパントに向かって走り出した。

拓海（変身時はジョーカー）

「ハア！」

マグマ・ドーパント

『グワア！？』

そして拓海はマグマ・ドーパントに蹴りを入れ、マグマ・ドーパントも反撃といわんばかりに火炎弾を放ってくるが、拓海はそれをパンチやキックで弾く。

マグマ・ドーパント

『な！？俺様の火炎弾を弾いただと！？』

ジョーカー

「甘いんだよ！オラオラオラオラオラオラオラオラオラアアアアアアアア！」

そう言って拓海はマグマ・ドーパントに某不思議な冒険の主人公のマシンガンパンチを浴びせる。

ジャン

「す、凄い。拓海ってあんなに強かったんだ……」

まるん

「ポ~~~~ノノノ」

ジャンは拓海の強さに驚き、まるんに至っては拓海の戦いつ振りに見惚れていた。

マグマ・ドーパント

『この……調子に……のるなアア!!』

マグマ・ドーパントキレて辺り一面に火炎弾を撒き散らし、拓海は避けたが後ろにいたジャン達の方に向かって火炎弾が向かっていた。

ジョーカー

「しまった!?二人共、避ける!!」

ジャン

「へ?う、うわあ!?!」

まるん

「キヤアアアツ!?!」

拓海

「クソツ!間に合わない!?!」

二人に火炎弾が当たろうとしたその時、突然二人の前に髪が薄い青の色をしていて、ツインテールをしていて、手に青と白の色をした双銃を持った少女が現れて、その双銃で火炎弾を撃ち落とした。

ジャン

「え、え?」

???

「あなた達、大丈夫？」

まるん

「は、はい。大丈夫ですの」

???

「そう、その黒甲冑みたいなのを着ているあなた！ここは私に任せて、そのマグマみたいな怪物を倒しなさい！」

少女は拓海にそう言う。

ジョーカー

「誰だか知らないけど、助かる！そんなじゃあ、これで終わらせる！」

そう言うって拓海はロストドライバーからジョーカーメモリを取り出して、右腰に付いているマキシマムスロットに差し込む。

《ジョーカー！マキシマムドライブ！》

すると、拓海の右足にエネルギーが集まり、そのままマグマ・ドーパーントに向かって飛び蹴りの応用に飛びこむ。

拓海

「ライダーキック！」

バシユウンッ！！

マグマ・ドーパーント

『グワア！？』

ライダーキックがマグマ・ドーパントに決まり、そしてマグマ・ドーパントの体がスパークを起こす。

マグマ・ドーパント

『ば……馬鹿なアアアア!?!』

ドカアアアアッ!!

最後にそう叫び、マグマ・ドーパントは爆発し、爆発した後を見るとごろつきが気絶しておりその傍らにはマグマメモリが砕け散っていた。

ジョーカー

「ふう……終わったぜ」

そう言っつて拓海は変身を解き、ジャン達の所に向かった。

拓海

「二人を守ってくれてありがとう。俺は如月拓海、お前は？」

アリス

「私はアリス。此処とは違う次元から来たの。えっと……次元って知ってる？」

まろん

「え、ええ。なんとなく、聞いたことはありますの……」

ジャン

「はい、僕も前に教えてもらったことが」

拓海

「此処とは違う場所……いわばパラレルワールドだな。実際に俺も色んな世界を旅していたし」

アリス

「へえ、やけに詳しいと思ったたらあなたも次元を旅していたんだ。ところで、あなた達『クイーンズゲイト』って、聞いたことがあるかしら？」

アリスは拓海達にそう聞いてきた。

まるん

「クイーンズゲイト？…ううん、私は知らないですの…」

拓海

「俺も知らないな…」

アリス

「やっぱり知らないか。それじゃーから説明するわね。クイーンズゲイトというのは、次元と他の次元を繋ぐゲイトよ。このゲイトを使えば、自分の今いる次元を飛び越え、あらゆる次元に自由に移動することが出来るの」

拓海

「へえ、結構便利なゲイトだな。俺は何時も自分でワームホールを作って移動するけど、かなりランダムだからな」

アリス

「それだけじゃない。使い方によっては全ての次元を支配すること

ができるとも言われているわ」

まるん

「……全ての…支配を…」

ジャン

「す、すごいものなんですね……」

ジャンとまるんはクイーンズゲイトの凄さに驚いていた。

アリス

「でもね、そのゲイトが突然…どこかに消えてしまったの」

拓海

「消えた？どうしてだ？」

アリス

「そ、そのへんはともかく…次元と次元を繋いでいたゲイトが消えてしまった訳だから…当然その影響はゲイトに繋がっていた次元…事実上、ほとんど全ての次元に及ぶことになるわ。つまり、あなた達がこうしてこの次元に飛ばされてきたのも、その影響の一部って事よ」

まるん

「そ、そんなぁ……」

拓海

「……なるほど、とりあえずはアリス的には俺らと協力してそのクイーンズゲイトを見つけ出して正常化するした方が良いな。俺で良ければ協力する。ちようど気になることがあるしな」

拓海はそう言ってさっき回収したマグマメモリを見た。
こうして、拓海達はアリスと共にクイーンズゲイトを探す事にした
のだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0992z/>

クイーンズゲイト スパイナルカオス～多次元を旅する戦士の戦い～

2011年12月19日01時54分発行